

日本とインドをつなぐ「カレー文化」は、ボースの日本亡命に始まった…。

〔純印度式カレー誕生物語〕

昭和2(1927)年から現在まで変わらず愛される新宿中村屋の代名詞「純印度式カレー」。その発売には、インド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースと中村屋の創業者夫妻との運命的な出会いがありました。

1. 創業者夫妻とラス・ビハリ・ボースの出会い

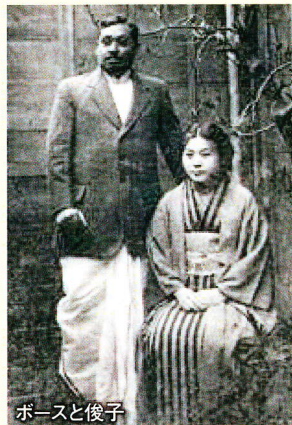


ラス・ビハリ・ボース

ボースは、1886(明治19)年、インドベンガル地方に生まれました。当時、イギリスの植民地として圧政に苦しんでいた祖国インドを救おうと独立運動に身を投じます。しかし、インド総督への襲撃をきっかけに、イギリス政府から厳しい追及を受け、1915(大正4)年、日本に亡命します。

日本では孫文と知り合い、その紹介で頭山満の知遇を得て潜伏生活を送ります。しかし、それがイギリス政府に伝わり、日英同盟を結んでいた日本政府は国外退去命令を出します。退去日の前日に頭山から依頼を受けた創業者の相馬愛蔵・黒光夫妻は、ボースを中村屋の敷地内にあったアトリエで匿います。一商店が政府の意に反して亡命者を匿うことは大変なことでしたが、中村屋の従業員全員が団結し、保護にあたりました。

2. ボースを献身的に支えた俊子



ボースと俊子

亡命の翌年、日本政府はボース保護に方針転換しますが、イギリスからの追及は続きます。

中村屋を出たボースは隠れ家を転々としますが、この時、逃亡生活を陰で支えたのが相馬夫妻の長女 俊子でした。相馬夫妻とボースの連絡役を務め、頭山満の提案で後に二人は結婚。

二人の子供を授かりますが、逃亡生活の心労がたたリ、俊子は1925(大正14)年、26歳で早逝します。

自分を支えてくれた人を幸せにできなかった…。ボースの無念は計り知れないものだったにちがいない。

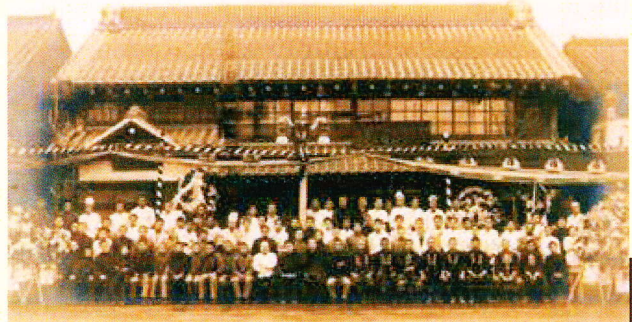
3. 純印度式カレー誕生

当時、日本に広まっていたカレーはイギリスから伝わった小麦粉を使用した、祖国インドのカレーとは別のものでした。

俊子の死後も中村屋と交流を深めたボースは本場のカレーを日本に紹介したいとの思いから、中村屋で喫茶部(レストラン)を開設する折に、純印度式カレーをメニューにすることを提案し、1927(昭和2)年に発売しました。

材料を厳選し、スパイスをふんだんに使った本格カレーは、その発売エピソードも手伝って評判を博します。町の洋食屋のカレーが10~12銭だったのに対し、中村屋のカレーは80銭でしたが、飛ぶように売れたという記録が残っています。

それはボースにとって、もう一つの独立運動だったのかもしれない。



1927年 喫茶部(レストラン)開設当日の記念写真



発売当初の「純印度式カレー」のセット